

長期療養者の知覚されたソーシャルサポートと個人内因子との関連

○國武加奈
(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

深澤美華恵
(福岡教育大学特別支援教育講座)

竹田一則
(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 長期療養者・ソーシャルサポート・個人内因子

【目的】

疾患により長期の療養を必要とする子ども（以下、長期療養児）については、病気への不安や家族・友人と離れた孤独感などから、心理的に不安定な状態に陥り易いということが指摘されている（文部省, 1994）。このような心理的苦痛に対するストレス緩和要因の一つとして、ソーシャルサポートが挙げられる。ソーシャルサポートとは、他者との間の社会的支援関係を指し、社会心理学の領域では以下の三つの次元に分類されている。その三つの次元とは、①「社会的包絡(social embeddedness)」: 個人の持つ社会的ネットワークの大きさやネットワークを構成する成員間の緊密性などのような人間関係の構造、②「知覚されたソーシャルサポート(perceived support)」: 他者からの援助を受ける可能性に対する期待、あるいは援助に対する主観的評価、③「実行サポート(enacted support)」: 他者から実際に受けた援助である（岡安・嶋田・坂野, 1993）。そして、その中で特に、「知覚されたソーシャルサポート」の水準が高いほどストレス反応が小さいことが報告されている（岡安ら, 1993）。その一方で、ある特定の心理的特性が、ソーシャルサポートの認知や効果に影響を与えるという先行研究がある。それらのある特定の心理的特性としては、「依存的傾向」・「自尊感情の低さ」・「不安の高さ」が挙げられている（福岡, 1998；上田ら, 2010；Caldwell & Reinhart, 1988）。これらの先行研究は健康者を対象として行われたもので、長期療養者の知覚されたソーシャルサポートと個人内因子との関連は明らかにされておらず、心理的安定を目的とした実践でも重視されているとはいえない。そこで、本研究では、四つの心理的特性（依存的傾向、自尊感情、状態不安、特性不安）と、知覚されたソーシャルサポートとの関連について明らかにし、長期療養児の心理的な支援方法を検討することを目的とする。

【方法】

- 調査対象
 - 健康大学生: 大学生 33 名 (男性 6 名, 女性 27 名)
 - 長期療養者: 慢性疾患患者 13 名 (男性 9 名, 女性 4 名)
- 調査内容
 - 知覚されたソーシャルサポート: SESS (久田ら, 1989) を用いた。
 - 依存的傾向: 対人依存尺度 (竹澤ら, 2004) を用いた。
 - 自尊感情: 自尊感情尺度 (山本ら, 1982) を用いた。
 - 状態・特性不安: STAI (Form X) (水口ら, 1970) を用いた。
- 分析方法

関連因子について健康大学生及び長期療養者を t 検定により比較するとともに、知覚されたソーシャルサポートと関連因子との関係について性別をダミー係数としてその影響を取り除いた偏相関分析を行った。
- 倫理的配慮

得られたデータについては、研究以外の目的で用いないこと、統計的に処理し、個人が特定されるような形での分析はしないことを書面にて説明し、同意が得られた上で行った。

【結果】

- 健康大学生における各因子にみられる特性とその関連

「自尊感情」と「知覚されたソーシャルサポート」との間に有意な正の相関 ($p < .01$) がみられ、「状態不安・特性不安」と「知覚されたソーシャルサポート」との間にそれぞれ有意な負の相関 ($p < .01, p < .05$) がみられた (Table 1)。したがって、健康大学生では、自尊感情が高い者ほど他者からのサポート知覚が高く、状態不安・特性不安が高い者ほど、他者からのサポート知覚が低いということが明らかになった。
- 長期療養者における各因子にみられる特性とその関連

「依存」と「知覚されたソーシャルサポート」との間に負の相関 ($p < .05$) がみられ、「状態不安・特性不安」と「知覚されたソーシャルサポート」との間にそれぞれ負の相関の有意傾向 ($.05 < p < .10$) がみられた (Table 1)。

Table 1 知覚されたソーシャルサポートと各因子との関連

	依存	自尊感情	状態不安	特性不安
健康大学生 ソーシャルサポート	.133	.568***	-.513***	-.421**
長期療養者 ソーシャルサポート	-.654**	.241	-.523*	-.538*

※表中の統計量は偏相関係数, *** $p < .01$ ** $.01 < p < .05$ * $.05 < p < .10$

したがって、長期療養者では、依存的傾向が高い者は、他者からのサポート知覚が低く、状態不安・特性不安の高い者は、他者からのサポート知覚が低い傾向があるということが明らかになった。

【考察】

長期療養者と健康大学生の結果を比較すると、依存的傾向及び自尊感情と知覚されたソーシャルサポートとの関連で異なる相関関係が存在することが明らかになった。すなわち、長期療養者の知覚されたソーシャルサポートに関わる個人内因子は健康者とは異なるといえ、長期療養者は独特の因子構造をもつことが推測される。具体的には、長期療養者で、依存的傾向・状態不安・特性不安の高い者は、知覚されたソーシャルサポートが低いことが明らかになった。このことから、長期療養児の心理的支援を検討する場合は、依存的性を低くするために自己管理能力や自立心を育てる指導を検討したり、不安を緩和するための支援を検討したりすることが有効であると考えられる。Caldwell & Reinhart (1988) は、不安の高い者のソーシャルサポートについて、「情緒的なサポート (emotional support)」よりも「指導的なサポート (guidance)」を求める傾向にあることを指摘している。そのため、長期療養児における不安の高いケースでも、後者の「指導的なサポート」を行っていくことが不安を緩和する支援として有効であると考えられる。

それに加えて、知覚されたソーシャルサポートの高さは過去に他者からサポートを受けた経験の多さと密接に関係している（岡安ら, 1993）という知覚されたソーシャルサポートの特性を生かし、長期療養児に対しては、幼少期から適切なサポートを行い、他者からサポートを受けたという経験を積み重ねていくことも有効な手段だと考えられる。

【謝辞】

本研究の一部は科学研究費補助金 (15K17425) (2015 - 2019 年) の助成により行われた。

【文献】

- ・Caldwell, R. A., & Reinhart, M. A., 1988, The relationship of personality to individual differences in the use of type and source of social support. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 6, 140-146.
 - ・福岡欣治 (1998) 依存的な人にとってのソーシャル・サポートの限界—他者依存性と知覚されたソーシャルサポートの効果に関する基礎的研究—。静岡県立大学短期大学部研究紀要, 12 (3), 4.
 - ・久田満・千田茂博・箕口雅博 (1989) 学生用ソーシャルサポート尺度作成の試み (1), 日本社会心理学会第 30 回大会論文集, 143-144.
 - ・水口公信・下中順子・中里克治 (1970) 日本語版 STAI : 状態・特性不安検査。三京房。
 - ・文部省 (1994) 病気療養児の教育について。文部省初等中等教育局長通知。
 - ・岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993) 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果。教育心理学研究, 41 (3), 302-312.
 - ・竹澤みどり・小玉正博 (2004) 青年期後期における依存的傾向の適応的観点からの検討。教育心理学研究, 52, 310-319.
 - ・上田敏子・窪田辰政・樋口倫子・橋本佐由理・宗像恒次 (2010) 大学生の自己否定感とソーシャルサポートとの関連。日本教育心理学会総会発表論文集 (52), 569.
 - ・山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造。教育心理学研究, 30, 1, 64-68.
- (KUNITAKE Kana, FUKASAWA Mikae, TAKEDA Kazunori)